

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 11 日現在

機関番号：34414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381344

研究課題名(和文) 知的な遅れのない発達障害が疑われる児童の人物画描画特徴に関する研究

研究課題名(英文) Study of relationship between figure drawing of children with behavior and/or learning problems in regular class and assessment by teachers.

研究代表者

落合 利佳 (Ochiai, Rika)

大阪大谷大学・教育学部・教授

研究者番号：80435304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：通常級在籍児童に対して教員からみて「気になる子」と「気になる内容」、男性像・女性像の人物画描画特徴については発達障害児に対しても検討を行った。「気になる子」は性差を認め、自閉症スペクトラム障害および注意欠如多動性障害が多く、半数で複数の障害が疑われた。「気になる子」、「気になる内容」は教員によって評価がまちまちであり、疑われる発達障害、特に自閉症スペクトラム障害の障害特性に対して適切に評価されていない傾向にあった。人物画描画では、特定の項目で特徴的な所見が見られ他、人物画(男性・女性)が「描けない/描きたくない」ことも一つの特徴的な所見と考えられた。

研究成果の概要(英文)：Evaluations done by teachers on students about their behavior and learning problems were investigated. Boys were more likely to be suspected to have behavioral problems. Within these children, many were strongly suspected to have ASD, ADHD, or LD, and half of were diagnosed with multiple of these disorders. But these observations made by the teachers are highly subjective, and the diagnosis did not necessarily match. For instance, 28% of children with ASD were without Triad of Impairments. There were statistically significant correlations between behavioral/learning problems and several DAM items. There was a gap between assessments by teachers for children's behavior and/or learning problems and diagnosis, especially ASD and dysgraphia. We also studied about figure drawings of children with developmental disabilities and found several characteristic features in them. For example, many of children diagnosed with ASD were unable to or did not prefer to draw figures.

研究分野：教育学

キーワード：発達障害 小学生 人物画 気になる子

1. 研究開始当初の背景

(1) 教育現場において支援が必要な児童の現状と就学前の「気になる子」の特徴
知的に遅れない学習面や行動面で困難があると推定された小学生は 7.7%であり、これらの児童の 38.6%は現在・過去にわたって支援を受けていない。就学前の「気になる子」の多くが、知的な遅れがない発達障害の特徴を持っており、このような子どもが抱える問題は軽いものではないのにもかかわらず、発見されにくい、認められにくい、理解されにくい、という困難さを抱えている。

(2) 人物画知能検査の利点と問題点

DAM グッドイナフ人物画知能検査は、人物あり、簡便かつ客観的に子どもの発達を評価できる点で利点がある。本邦においては男子像を用いた検査が標準化されている。しかし、人物画発達には性差があり、男性像・女性像で評価する方法もあるが、評価項目が多く 70 以上と煩雑である。

(3) 発達障害児、「気になる子(知的に遅れない発達障害が疑われる児童)」の人物画知能および発達障害児の人物画描画研究では、言語・認知発達などに相応する、発達障害児に関しては生活年齢に比して幼い、項目によるアンバランスさ、特徴の分類に関する研究などがある。「気になる子」の人物画描画研究では、就学前児童では DAM-IQ の低さ、アンバランスさがあり、予備調査においても小学 1 年生で、同性の人物画の特定の複数項目で特徴的な所見があることが指摘されている。また、「気になる内容」にも性差を認めている。

2. 研究の目的

「知的な遅れない発達障害児が疑われる児童(気になる子)」に特徴的な人物画描画項目を選定する。客観的な評価項目は将来的に教育現場で活用することによって、教師の「気になる子」への気づきと理解を促し、適切な支援方法が選択されることが期待できる。

(1) 「気になる子」の描画発達、「気になる子」と「気になる内容(障害特性:学習面・行動面)」の推移など個別及び包括的に時間軸からみた特徴を明確にする。

(2) 「気になる子」の発達障害特性が疑われる特徴、知的遅れない発達障害児の人物画描画の特徴を明らかにし、知的な遅れない発達障害児との人物画描画特徴の共通項目を特定する。

3. 研究の方法

(1) 小学校通常級在籍児童における「気になる子」の抽出、および人物画描画検査
大阪府内公立小学校通常級在籍の児童を対象に人物画描画検査(男性・女性像、平成 26・

27 年) 学習および行動自己評価アンケート(27 年度実施、対象:3 学年以上の児童)を実施した。また、担任を対象に「気になる子」の調査を 1 年ごとに計 2 回行った。また、前年度に行った予備調査も参考にした。

(2) 専門機関で発達障害の診断を受けている通常級在籍の小学生を対象に、人物画描画検査(男性・女性像)を実施した。また、発達外来で検査実施日から最近の発達検査(WISC-IV または新版 K 式発達検査 2001)の結果を参考に用いた。

(3) 関連項目の選出

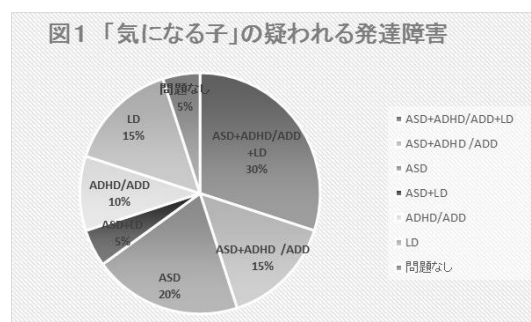
「気になる子」、疑われる診断名と DAM 項目(男性・女性像)について検討を行った。

以下、担任が著しい困難を示している内容から疑われる発達障害名を、自閉症スペクトラム障害を ASD、注意欠如多動性障害を ADHD、学習障害を LD と略す。

4. 研究成果

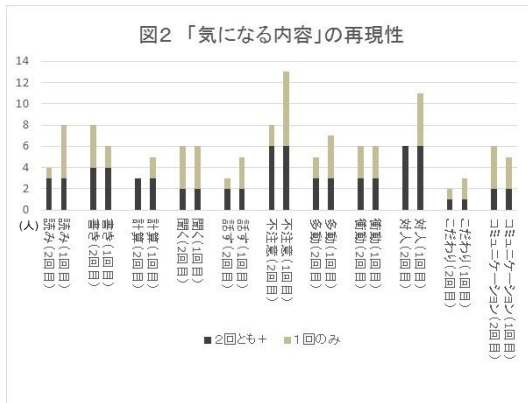
(1) 「気になる子」の傾向と疑われる障害
対象となった児童 238 人(男児 112、女児 126)の中で、「気になる子」は 30%/15% (1 回目/2 回目)であったが、2 回の調査ともに「気になる子」は 8.4%であり、男子児童 13.4%、女子児童の 4%と男児に多い傾向にあった。人物画描画(男性・女性像 両方もしくはどちらか片方)が評価不能(描かなかった)であった児童は 8 名いたがうち 7 名が 2 回の調査のうち 1 回で「気になる子」として挙がっていた。

またこれらの児童のうち、強く疑われる障害名は、ASD70%、ADHD(ADD)55%、LD50%であり、また、ASD + LD + ADHD 30%(男女比 5:1)、ASD+ADHD 15%(男女比 1:0)、ASD 20%(男



女比 3:1)、ASD +LD 5%、ADHD 10%(男女比 1:0)、LD 15%(男女比 1:2)、問題なし 5%(男女比 0:1)と 50%の児童で複数の障害が疑われた(図 1)。また、これらの疑われた障害は教員が指摘した気になる内容とはかならずしも障害特性と一致せず、同一児童においても、評価する教員(その年の担任)によって「気になる内容」も一致しなかった(図 2)。特に、書字で気になる児童は 2 回の調査とも全員、書字障害の基準を満たさず、60%~80%は ASD もしくは ASD + ADHD(不注意型)が疑われた。ASD が疑われた児童の 14%

はこだわり、社会性の問題、コミュニケーションの問題すべて有していると評価されていたが、28%は、3つ組の特徴については担任が特に問題なしと評価していた。また、学習障害のうち「聞く」「話す」「推論する」が該当した児童はASDが強く疑われた。



発達障害は先天性の脳の機能障害であり、環境や発達の過程によって目立たなくなることはあっても治癒することはない。したがって理論的には常に一定の割合で発達障害児は各学年に存在し増減はしないはずである調査結果は、これとは矛盾しており、教員が「気になる内容」は、子どもの疑われる障害特性を反映していない、担任による評価にばらつきが大きい、「気になる子」も一定ではなく半数以上が入れ替わる傾向にあることが明らかになった。学年が変わりその年の担任にとって「気になる子」ではなくなった児童の中には、教員に気づかれていない/気づきにくい発達障害の児童が含まれていることが十分に考えられた。特にASDが疑われる児童に対し、教員は何か「気になる」としても、その内容は3つ組に関してではなく、学習面(話す、聞く、推論する、書字)などで気になっていた。したがって、「書字」が気になる児童に対してはADHDもしくはASDも疑う必要があると考えられた。

(2) 「気になる子」、「気になる内容」と人物画描画特徴
 平均 DAM-IQ は、 81.9 ± 14.0 (コントロール 84.8 ± 12.4)であった。行動または学習で気になる場合、「読み」:衣類関連項目・「指」、「書き」:「衣類2種類」、「計算」:「目」・「体幹の割合」、「こだわり」:「衣類関連項目」と「顔関連項目」の差といったくつかの項目と関連がみられた。(表1、表2)。また、低学年で

表1 「気になる内容」(学習面)と人物画描画項目との関連

体の部位	小林	Goodenough	人物画描画項目	気になる内容	p
眼	11	16a.	まゆまたはまつ毛	計算	p<0.05
	12	9a.	衣類	読み	p<0.01
衣類	19	9b.	衣類2以上	読み	p<0.01
				書き	p<0.05
指	16,28,32,48,38	10a.,10b.,10c.,10d.,10e	指、指の細部、指の数、拇指の分化、掌	読み	p<0.05
	腕と脚	15	5b.	腕と脚のつけ方B	読み
胴	8	4b.	胴の長さ	計算	p<0.05

は、「計算」と「指の数」、「コミュニケーション」や「こだわり」のある児では、描画項目のアンバランスさを伴う特に衣類に関してパターンの描画、描画タッチが極端に毎年変化するなどの特徴が認められた(図3引用)

表2 「気になる内容」(行動面)と人物画描画項目との関連

体の部位	小林	Goodenough	人物画描画項目	気になる内容	p
鼻・口	5	7c.	口	衝動性	p<0.05
髪	7	8a.	毛髪A	衝動性	p<0.01
眼	2	7a.	眼	衝動性	p<0.05
	21	16c.	眼の形	衝動性	p<0.05
衣類	19	9b.	衣類2以上	多動	p<0.05
	47	9e.	衣類の種類完成	不注意	p<0.01
手	38	10e.	掌	多動	p<0.01
	27	12b.	腕の割合	多動	p<0.01
腕と足	41	11b.	脚の関節、	不注意	p<0.01
	3	4a.	胴存在	不注意	p<0.01
体幹	31	48	胴の輪郭	多動	p<0.01
				不注意	p<0.01

図3 「気になる子」の人物画の推移の例



(1)の結果からも、「気になる内容」は必ずしも児童の障害特性を反映していないが、少なくとも、なんらかの問題がある児童(発達障害が疑われる児童)の描画では、顔、体幹、顔と衣類関連項目の差に特徴があると考えられた。

(3) 行動自己評価アンケートと気になる子、気になる内容との関連
 学習および行動自己評価の分析では、学習面や行動面に対する児童自身の自己評価と担任からみた「気になる子」「気になる内容」との間に相関は認められなかった。児童自身の自己評価と教員の評価が一致していないことを示しており、児童自身が自身の問題に気付いていない場合や、教員が児童の問題に気付いていない可能性が示唆された。

(4) 通常級在籍の発達障害児の人物画描画の特徴
 通常級に在籍している発達障害児に対する人物画描画検査では、「ヒト(男の子と女の子)を描いてください」という抽象的な指示のみで人物画描画を行うことに対して、描画

に苦手意識がある、(男性・女性像)を描くという指示に従って描画をすることができず自分の描きたい(描ける)ものを描くといった、「描けない/描きたくない」という理由で同意を得られない、もしくは評価不能ケースが多く、このような児童はいずれも ASD もしくは ASD+ADHD の診断を受けていた。人物画描画が実際に可能であった児童の IQ または DQ の平均は標準域で、遅れはなかったが、DAM-IQ の平均は、男児で男性・女性像ともに境界域(70-79)、女児では標準域であり、特に男児で低い傾向にあった。女性像で、髪を長くする、スカートの描出が見られるなど、明らかに性別を意識して描出が見られた児童では、DAM-IQ の男性像/女性像比が大きい傾向がみられた。DAM-IQ/(IQ または DQ) 比は、男性・女性像ともに低い数値を示し、実際の IQ または DQ と比較し低く、また、男性像と比し女性像の方が低い傾向にあった。

描画項目では、「描線 A」に関して特徴的な所見が得られた。ADHD もしくは ASD+ADHD の全児童の男子像で不通過であった一方で、ASD 全例で通過していた。同じく、女子像においては、ADHD もしくは ASD+ADHD の全児童が「描線 A」が不通過であった。「指」に関連して特徴的な傾向が見られた。指の数」と K 式発達検査 2001 の「左右指全」との関連は認めなかった。また、いびつな体幹、棒状の四肢、指(手掌を含む)の欠損、アンバランスな描出なども認められた。発達障害児の人物画描画特徴として、異性を区別して描出できていない場合は一般児童で認められる異性像と同性像の DAM-IQ の差が認められなかったが、その要因として性差を認識できていない可能性が示唆された。ADHD もしくは ADHD+ASD の児では、不注意からくると考えられる描線の稚拙さ(「描線 A」不通過)がみられた。ASD では、いびつな体幹、棒状の四肢、指(手掌を含む)の欠損、アンバランスな描出に加え、「人物画が描けない/描かない」が特徴的な所見と考えられた。

教員はクラス内の「気になる子」にたいして、第一に ASD や ADHD/ADD を疑うこと、複数の障害を念頭に置く必要があり、特に学習面において「気になる子」に対しては学習障害以外の可能性も考えるべきであると考えられた。

人物画については、気になると感じる児童には継続して人物画描画検査を行い、描線 A (線タッチ) 顔・衣類・手の項目の他、「描画できない」場合も所見ととらえるべきであると考えられた。

<引用文献>

落合 利佳、本吉 大介、通常級に在籍している気になる子の人物画描画特徴と推移、大阪大谷大学教育学部特別支援教育実践研究センター紀要、1号、2017、11-19

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

落合 利佳、本吉 大介、通常級に在籍している気になる子の人物画描画特徴と推移、大阪大谷大学教育学部特別支援教育実践研究センター紀要、査読無、1号、2017、11-19

本吉 大介、小田 浩伸、落合 利佳、特別支援教育専攻学生に対する ICT 活用能力向上を目指した授業の取り組み、大阪大谷大学教育学部特別支援教育実践研究センター紀要、査読無、1号、2017、47-61

落合 利佳、郷間 英世、現代の小学生の人物画の特徴と影響因子、大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要、査読無、5号、2015、1-10

[学会発表](計 5件)

Rika Ochiai, Daisuke Motoyoshi, Hideyo Goma, Do teachers assess students with behavior and/or learning problems in regular class properly?, 2017 IASSIDD 4th Asia-Pacific Regional Congress, 2017年11月13-16日、Ambassador Hotel、バンコク(タイ)

落合 利佳、本吉 大介、郷間 英世、知的な遅れのない発達障害児の人物画描画特徴、日本発達障害学会第51回研究大会、2016年8月27日、京都教育大学(京都府京都市)

Rika Ochiai, Daisuke Motoyoshi, Hideyo Goma, Characteristics of figure drawing in school-aged children who may have developmental impairments, IASSIDD 15th World Congress, 2016年8月15-19日、MELBOURNE CONVENTION AND EXHIBITION CENTRE、メルボルン(オーストラリア)

落合 利佳、普通級に在籍している気になる子の人物画描画発達の特徴について、日本学校保健学会 第62回学術大会、2015年11月28日、岡山コンベンションセンター(岡山県岡山市)

Rika Ochiai, Hideyo Goma, Evaluation of the Draw-a-Man Test among Japanese children, 2015 IASSIDD Americas Regional Congress, Hawaii Convention Center, 2015年5月21-22日、ハワイ(アメリカ合衆国)

6. 研究組織

(1)研究代表者

落合 利佳 (OCHIAI, Rika) 大阪大谷大学・教育学部・教授 研究者番号: 80435

3 0 4

(2)研究分担者

郷間 英世 (GOMA、Hideyo) 京都教育大学・
教育学部・教授 研究者番号： 4 0 2 3 4
9 6 8

(3)本吉 大介 (MOTOYOSHI、Daisuke) 大阪
大谷大学・教育学部・講師 研究者番号：
3 0 7 1 2 3 3 5

(平成 27 年度より研究分担者)